

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「スーパードライ、再エネで作る」
- 2) 「ハイネケンスペイン、太陽光発電ですべての飲料を醸造へ」
- 3) 「ニューヨークで持続可能な農業を 木を模した空中栽培システム “Glasisir” 」

---

### 1) 「スーパードライ、再エネで作る」

アサヒビールは、「スーパードライ」の500ミリリットル缶ビールの製造に、再生可能エネルギー「グリーン電力」を5月下旬から使うと発表した。風力やバイオマスといった地球環境への負担が少ない方法で発電された電力の調達量を25%増やしていく計画だ。

スーパードライの家庭向け缶商品の一部などにとどまっていたグリーン電力の調達を増やすことで、再エネ普及を後押しする考えだ。アサヒビールはスーパードライを生産する全国8工場で、350ミリリットル缶を生産する電力を全てグリーン電力から調達している。1月からは福島工場（福島県本宮市）と吹田工場（大阪府吹田市）で生産するノンアルコールのビール飲料「ドライゼロ」もグリーン電力からの調達にすでに変更している。

今回の500ミリリットル缶のグリーン電力の調達量は2020年に500万キロワット時を計画している。350ミリリットル缶や、ノンアルコールのビール飲料の生産にも同2000万キロワット時を調達する計画で、合計で2500万キロワット時と25%増やす見込みだ。

今回の拡大により、アサヒビール全体での二酸化炭素（CO2）の排出量を年間で約1万1600トン削減できる見込みという。

同社は缶本体の側面や、包装資材にグリーン電力を活用して生産した製品であることを示す「グリーン・エネルギー・マーク」を掲載し、消費者にも再エネを活用していることを訴える。

（2020/03/20 日経MJ）

※コメント次ニュースへ

---

### 2) 「ハイネケンスペイン、太陽光発電ですべての飲料を醸造へ」

オランダに本拠地を置く醸造業者ハイネケンが、エネルギー供給会社イベルドロウラとの間で、太陽光発電プラントから電力を購入する長期電力購入契約を締結すると発表した。ハイネケンスペインのすべての醸造所とオフィスの電力が、100%太陽光発電で賄われるようになる。

両社の合意に基づき、新しい太陽光発電所がアンデバロに建設され、2020年中に本格稼働する予定だ。発電所の年間発電能力は82GWhで、これは年間15,000世帯以上の住宅に電力を供給するのに相当する。これによってCO2排出量が年間10万トン以上削減されるが、これは約25,000世帯が年間に排出するCO2排出量に相当するものであるという。環境に好影響を与えるだけでなく、新しい太陽光発電所の設置は地域社会に推定200人分もの雇用を生み出す。

ハイネケン・スペインのマネージングディレクター、ギヨーム・デュヴェルディアは、「アンデバロの発電所によって、すべての飲料は太陽から直接作られた電気を使って醸造されるようになります。醸造所で必要とされるエネルギーをすべて賄ったのちには、ガスボイラーをバイオマス利用のものに置き換え、2023年までに再生可能エネルギーのみを使用してビールを醸造できるようにします。」と述べた。

スペインにおけるこの新たな取り組みは、ハイネケン インターナショナルのグローバルサステナビリティ戦略 “Brewing a Better World “ の一環である。この戦略の中の1つとして、「Drop the C」という炭素削減プログラムがあり、2030年までに再生可能な熱エネルギーと電力の割合を世界全体で少なくとも70%にまで拡大することを目指している。現在、世界中で29件の再生可能エネルギープロジェクトが進行中で、風力や太陽エネルギー、バイオマス、バイオガスの利用に焦点を当てている。

環境配慮の側面から製品を選ぶ際、何でできているかには気付くことができても、製造過程でどんなエネルギーが使われているかまで思いが及ばないこともあるかもしれない。しかし本来、製造でどんなエネルギーが使われたかということは、巡り巡って私たちの将来に跳ね返ってくる。様々な企業がもっと再生可能エネルギーを活用するになれば、消費者ももっとクリーンな選択ができるようになるだろう。

前のアサヒビールやこのニュースのように、各企業共環境問題についてはそれぞれ様々な企業努力を行い取り組んできていると思うが、果たして消費者にそれがどこまで届いているのだろう。クリーンな選択をする基準があいまいで、選びようがない状況になっていないか。世界基準でその足並みが揃えばよいが、まずは国内での話だろう。単にそれを示すマークを増やすだけでなく、企業の取り組みが売場で目に見える・比較できる陳列を行うなどして、「知ってる人だけが知る」状況をなくさなければ環境問題対策もなかなか前に進まないのではないか。

(2020/03/17 IDEAS FOR GOOD)

---

### 3) 「ニューヨークで持続可能な農業を。木を模した空中栽培システム “Glasir”」

今日の農業は、非常に多くの水と土地を使う。地球の淡水の大部分と地表の37%は農業に使われているという。WHOによると8.4億人が基本的な給水サービスを利用できず、2025年には世界人口の半分が水ストレスの高い地域に住むことになる。また、2050年には世界人口が100億人に到達すると予測されており、この人口を養うには今の2倍近くの農業生産が必要となる。人類の未来のために、持続可能な農業を推進しなければならない。

ベルゲンとニューヨークを拠点に活動するイノベーションスタジオのFramlabは、農業が環境に与える負担を減らすために、空中栽培のシステムを取り入れた樹形の都市農業ソリューション「Glasir」をブルックリンに作るという。Glasirという名は、北欧神話に登場する特殊な力を持つ木にちなんでつけられている。

Glasirの大きな特徴は、空中栽培を行うモジュールがいくつも組み合わせられている点だ。ひとつのモジュールは年間480ポンド（約217キログラム）の野菜を栽培することができ、そのモジュールがいくつも繋がり樹形になると、年間48,000ポンドも栽培できる。空中栽培は、従来の農業で使う土地のわずか10%で同程度の収穫量を実現できるため、広い土地を確保できない都市に向けた農法だ。さらに、空中栽培は従来の農業で使う水量のわずか9%しか必要とせず、水を効率的に利用できる。肥料や農薬の量も大きく減らせるうえ、植物の根がより多くのミネラルやビタミンを吸収するので、より栄養価の高い野菜ができるという。

Glasirのシステムには人工知能と環境センサーが搭載されており、気温や卓越風などの環境条件を測定することで、Glasirの成長を場所に依りて最適化することができる。成長の最適化は、ドローンが必要に応じてモジュールを移動することで行われる。Glasirを動かすのに必要なエネルギーはすべて太陽電池でまかなわれ、外塗に使われている酸化チタンが空気中の汚染物質を抽出し、周囲の空気を綺麗にする。

ブルックリンは過去10年間で急激な経済成長を遂げ、ジェントリフィケーションにより一部は食通が集う場所となったが、区全体では20%が食糧不足の状態だ。経済成長は多くのポジティブな変化をもたらしたが、一方で社会成層を形づくることになった。Glasirはまず、イーストニューヨークやカナージーといったフードデザート（食の砂漠）に配置され、地元の人々に栄養価の高い食材を提供していくという。身近なところに自然がある暮らしは、私たちの血圧を下げたり心拍数を下げたりする効果があると証明されている。Glasirがある場所には、人々が集まりリラックスする静かな時間が流れるといい。

日本よりも貧困の格差、食料不足が深刻なアメリカにとって通常の農業ではさらに土壌や水の問題が重なり容易に大量生産できない現状があるといえる。このようにテクノロジーを活用した農業計画は近年多く見られ、少し前まで空想だった未来的な農業が現実味を帯びてきたように感じる。まだ計画段階ではあるが、実用化に向けてうまくすすんでほしい。

(2020/03/17 IDEAS FOR GOOD)